

「光は暗闇の中で輝いている」

ヨハネによる福音書 1:1-5

創世記 1:1-3

2025年11月30日

野村 友美 師

<福音書の役割>

今日からいよいよ、クリスマスを待ち望むアドベントに入りました。

ついこの間まで「暑いね」と言い合っていたのに、日が経つのは本当にあっという間ですね。

今年はヨハネによる福音書の言葉と共に、アドベントを過ごしていきたいと思います。

初めに言があった。

言は神と共にあった。

言は神であった。

こんな何とも不思議な言葉で、ヨハネによる福音書は始まっています。

マタイ、マルコ、ルカ、そしてヨハネの名前で書かれた4つの福音書。それぞれの福音書がそれぞれの書き方で、イエス・キリストについて、その言葉と出来事を伝えています。

福音書をそれぞれ読み比べてみると、同じ出来事でもあっちの福音書にはこう書いてあって、こっちの福音書には違うことが書いてある、なんていうことがありますよね。

「どっちが正しいの?」と不思議に思ったことが、皆さんもあるんじゃないでしょうか。

これは、どの福音書が正しくて、どの福音書が間違っているかということではないのです。

例えば私たちがある一つのことについて、誰かに説明しようとするとき。みんなが同じことを

感じ取って、同じように表現するとは限りませんよね。

たとえば、このピアノの上のクリスマス飾りについて誰かに伝えるとしたら、皆さんならどんなことをおっしゃるでしょうか?

綺麗、たくさん飾ってある、天使たちがかわいい、陶器だからけっこう重たい、お値段が高かった。みなさんそれぞれこのクリスマス飾りについて、知っていることや感じることを、伝えたいと思うことがいろいろあると思います。

同じように、イエス様についてのエピソードも、4つの福音書を書いたそれぞれが知っていること、感じたこと、伝えたいと思っていることがあるのです。

どれか一つの福音書にしか書かれていないこともありますし、同じイエス様の言葉や出来事についても、それぞれの角度からそれぞれの表現で描いています。

だからこそ私たちは4つの福音書を通して、立体的で生き生きとしたイエス様の姿を知ることができるんじゃないでしょうか。

どの福音書も、その始まりからそれぞれに個性的です。

マタイはイエス様に繋がる人たちの系図から。マルコは「神の子イエス・キリストの福音の初め」という宣言から。ルカは自分が何について伝えようとしているかの説明から、イエス様について話し始めています。

そして今日私たちが一緒に読んでいるヨハネの福音書が、イエス様について伝える最初の言葉として選んだのがこれです。

初めに言があった。

言は神と共にあった。

言は神であった。

<神様の言葉として来られたキリスト>

「初めに」というヨハネの語り出しは、旧約聖書の創世記の1章1節、つまり聖書のいちばん初めと同じ言葉が使われています。

初めに、神は天地を創造された。

聖書をスタートさせるこの言葉、「初めに」をヨハネはあえて、自分の福音書のスタートにも選んだようです。

「初めに、神は天地を創造された」で始まる創世記は、この後こう続きます。

「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、

神の霊が水の面を動いていた。

神は言われた。『光あれ。』

こうして、光があった。」

(創世記1:2-3)

混沌、カオス。つまり秩序もルールもない、いろんなものが入り混じって、ぐちゃぐちゃして不安定で、そこから何がどうなるかも分からない。そんな状態の暗闇に、神様の言葉が光を生み出した。

ここから私たちのこの世界は始まったのだ、と創世記は世界の成り立ちを物語っています。

天と地、昼と夜、空と海、植物と太陽と月と星、そしてすべての生き物のスタート地点には「神様の言葉」があった。

このことを、聖書は創世記の物語で、何よりもまず初めに伝えています。

そんな聖書の始まりの言葉を使って、イエス様という御方について最初にこれを伝えたい、とヨハネが選んだこと。それが「イエス・キリストは神様の言葉だ」という、ヨハネ自身の確信だったんです。

イエス・キリストは「神様の言葉」だ、とヨハネの

福音書はまず初めに、私たちに語りかけます。

この世界のすべてのものをスタートさせた、神様の言葉。神様と共にあって、神様そのものでもある、神様の言葉。

この「神様の言葉」としてイエス・キリストは来られたんだ、という宣言で、ヨハネはイエス様のことを伝え始めているんです。

ところで、「言葉」とは一体どういうものでしょうか。

私たちにとって、「言葉」って何でしょうか？言葉は何よりもまず、私たちがお互いに「伝えたい」と思うことを伝えるための手段です。自分がどう思っているか、何を知っていて、どう感じているか。何をしたいくて、どんなことを望んでいるのか。

私たちの内側にある形のないものに、相手が受け取るための形を与えるもの、それが「言葉」です。

だから相手に伝わってほしいことを正確に、少しでも詳しく伝えるために、私たちは言葉を選んで、言葉を使います。

「言霊」という考え方が日本にもありますが、「言葉には力がある」という感覚は、どの国の文化にも共通しているものでしょう。

私たちは言葉のおかげで、お互いのある程度は理解できます。

逆に「口は災いの元」というとおり、言葉のせいで陰悪になってしまうこともあります。言葉というものは、人や物事に影響を与えて、良くも悪くも状況を動かすものです。伝えたいと思うことを伝えるために、形のないものに形を与える力。

人や物事に影響を与えて、状況を動かす力。そういう力を私たち人間の言葉は持ってい

る、と言っていいでしょう。まして、神様の言葉は。

神様の思いを伝えて、それを形にする、神様の言葉。

それは混沌とした暗闇に光を生み出して、世界のすべてを創り上げるほどの力がある言葉のだと、聖書は私たちに教えています。

世界のすべてを生かすことも、殺すこともできる。そんな圧倒的な力を持つ神様の言葉が、私たちに命を与えるために、イエス・キリストという形をとって、この世界に送り出された。

この驚くべき出来事を、ヨハネによる福音書は最初に宣言しているんです。

多くの人にとって「死」というものは、絶望的な恐ろしさを感じさせるものでしょう。そこで自分のすべてが終わってしまう。

自分という存在も、生きてきた意味も、死によってやがて消えてしまう。

そんな「死」の悲しさや恐ろしさから私たちを救い出す力、永遠の命の希望を与える力を持って、イエス・キリストはこの世界に来られました。

この確信を、ヨハネの福音書は最初に掲げています。

死の暗闇に命の光を輝かせる「神の言」として、神様はその独り子を私たちの世界に送り出してくださった。これこそが何よりも真っ先に伝えたい大事なことで、すべての人に伝える良い知らせ、「福音」と呼ばれるものだと、ヨハネの福音書は告げ知らせているんです。

<暗闇に輝く言葉>

私たち人間の暗闇は、死の恐怖だけではありません。いつの時代でも、どこで生きていても、混沌とした罪の暗闇がいつだって、人の内側にも外側にも広がっています。

今まさに私たちが生きている、この現代社会だってそうでしょう。人々が目先の利益を追い求めて、自然環境を壊し続けた結果が、世界の各地で異常気象や災害を生み出しています。

国同士の争いや、権力者の理不尽な支配によって、多くの人の命と尊厳が今も奪われ続けています。

私たちの日常には、心が重たくなるような痛ましい事件や事故のニュースが溢れています。お互いの弱さや自分勝手さに傷つきながら、そして誰かを傷つけながら、私たち人間は同じ社会の中で、関わり合って生きているものです。

もちろん悪いニュースばかりじゃなくて、心温まる良いニュースだってあります。

誰かの役に立ちたい、助け合いたいという思いも、私たちの心には確かにあるでしょう。お互いに絶望するばかりでは、決してありません。良いときもあれば悪いときもある、だからこそ。

いろんな思惑が入り混じって、ぐちゃぐちゃして不安定で、どうなるのかわからない。

まさに混沌の暗闇が、いつも私たち人間の真ただ中にあります。

そんな私たちの混沌に、神様は「光あれ」という命の言葉をお与えになった。

すべての人の暗闇を照らす光、イエス・キリストをお与えになったんだ、とヨハネの福音書はまず初めに宣言します。

どうしようもなく混沌とした私たちの罪を、イエス様はご自分の命で十字架に打ち付けてくださいました。

死の暗闇の恐ろしさを、復活の命の光で照らし出してくださいました。

イエス・キリストという形をとった神様の愛の言葉は、すべての人の暗闇の中で、今この時も輝いているんです。

すべての人を救い出したいという神様の思いを伝えて、その思いを私たちの間で形にするために来られた、神様の愛の言葉。

イエス・キリストという御方の存在が、今も私たち一人一人に、すべての人に向かって語りかけています。

罪の混沌から立ち上がって、暗闇を照らす神様の言葉を受け取るようにと、イエス様は今も一人一人に呼びかけておられます。

あなたをお造りになった神様が、命の希望と喜びであなたを照らしたいと願っておられる。

この愛を信じて受け取るようにと、すべての人を招いておられます。

「暗闇は光を理解しなかった。」

そうヨハネによる福音書は語っています。

イエス・キリストという形で伝えられた神様の愛は、私たち人間の価値観で見れば、ちょっと眩しすぎるかもしれません。

私を愛してくださってるのはいいけど、他の人もみんな、あんな人やそんな人まで、私と同じように愛されているなんて。

「それはちょっと甘すぎるんじゃないか」なんて、不満を感じることもあるでしょう。

逆に「こんなにどうしようもない私なのに、神様は本当に愛しておられるんですか？」と疑いたくなることだって、きっとあります。

正しい善い人、しっかりとした信仰がある人だけが、神様に愛される資格がある。

そう言われる方が、私たちはたぶん受け入れやすいんです。

でも神様の愛の言葉は、びっくりするほど容赦がありません。ここは照らすけどあちらは照ら

さない、なんてことはないんです。

混沌の暗闇に「光あれ」と言われた神様の言葉が、この世界をスタートさせたように。

神様はイエス・キリストという愛の言葉で、すべての人の命を照らし出されます。

私たちすべての人の罪の暗闇に、イエス・キリストという救いの光を輝かせて、一人一人が神様の愛を受け取るのを待っておられます。

あなたに、あの人に、すべての人に、命の希望と喜びを受け取ってほしいんだ！と、神様の言葉は今日も私たち一人一人に伝えているんです。

圧倒的な愛と力に満ちた、神様の言葉。

罪と死の暗闇に輝いて、すべての人を照らす光。

イエス・キリストという御方が、私たちのこの世界に与えられた、この出来事を喜び祝うクリスマスが、今年も近づいています。

「光は暗闇の中で輝いている。」

ヨハネによる福音書の、この宣言を掲げて、私たちは今年も一緒にクリスマスを待ち望んでまいりましょう。

この世界で共に生きるすべての人に、神様の愛の言葉が届くことを心から祈り願いながら。

お祈りいたします。